

日本へ留学する中国人留学生の110年間にわたる歴史の回顧と啓発をめぐって

WANG, Xiaoqiu / 王, 曉秋

(出版者 / Publisher)

法政大学国際日本学研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

INTERNATIONAL JAPANESE STUDIES / 国際日本学

(巻 / Volume)

4

(開始ページ / Start Page)

153

(終了ページ / End Page)

159

(発行年 / Year)

2007-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00022592>

日本へ留学する中国人留学生の 110年間にわたる歴史の回顧と啓発をめぐって

王 曉 秋

110年前の1896年、13名の中国の若者が清政府の派遣で海を渡り、日本へ留学した。彼らは清政府から派遣された最初の留学生であり、中国人が日本へ留学に行く序幕となった。1896年から、中国では日本へ留学に行くブームと衰退期が何回も現れ、百年ぐらい続いていた。それは中国人の留学の歴史において重要な部分になっており、中国の近代・現代の歴史と中日両国関係の発展・変化に大きな影響を与えた。

ここでは、歴史の角度から、この110年間にわたる日本への留学の歴史の変遷及び今日への啓発についてまとめてみたい。

日本へ留学する中国人留学生の歴史における手がかりと各段階における背景及び特徴を明らかにするため、その110年間の歴史を五つの時期に分けることにする。

1896年—1911年は初めの時期であり、日本へ留学することがだんだん盛んになり、最初のピークに達した

周知のように、中国と日本の文化交流は1000年以上もの歴史を持っており、日本側が中国の文化などを学んだのが主流であった。当時、数多くの日本人留学生と僧侶たちが日本政府に派遣された遣隋使や遣唐使とともに中国に来た。それらの留学生たちは、中国の進んだ文化を日本に持ち帰り、日本社会の進歩を推し進め、両国の文化交流を促進したのである。しかし、近代になると、その交流の方向は逆になってきた。19世紀の末頃から20世紀の初めにかけて、中国の若者の間では日本へ留学するブームが現れてきた。どういう経緯でこうい

う変化を辿ってきたのか。交流の方向が逆になった転換点は、1894-1895年の中日甲午戦争（日清戦争）だと思う。戦後、日本に負けた中国は窮境に陥り、主権を失い、国を辱める「馬関条約」を締結させられた。この戦争について梁啓超氏によると、「中国人は4000年もの夢から起こされた」そうだ。この時点から、中国の知識人たちは中国の敗戦の原因と日本の発展の理由について考え始めた。康有為は「強い敵を師にして見習っては」と考え、日本に学んで改革維新を行い、中国を危機から救うことを主張していた。それで、実際に日本へ留学して、日本の改革と富国强兵の経験を勉強し、日本に取り入れられ、吸収された西洋文化を学ぶことは愛国心と志を持っている中国の若者の夢となった。

もちろん、日本へ留学するというブームが現れたのにはまた、いろいろな理由と条件が必要である。清政府が留学することを奨励していたこと、特に1905年の科举制度が廃止された後、海外への留学も一部の知識人にとって重要な進路になったこと、また、この時期日本政府は中国人留学生を受け入れる学校を設立するまで、積極的に中国人留学生を引き寄せる政策を取っていたことなどがその原因である。もう一つ明らかな理由は、日本へ留学することは欧米へ留学するより便利だということである。たとえば、地理的に近いし、交通が便利である上、費用も安い。しかも文字及び風俗習慣が似ていることなども挙げられる。

1896年、清政府が一回目の国費留学生13人を派遣するのをきっかけに、各地方政府も相次いで留学生を日本に派遣していった。その数は1899年になるとすでに200人あまりとなった。20世紀初期に、さらに大量の私費留学生が日本に渡り、1903年になると、日本へ行く留学生はすでに1000人を上回っていた。1905年から1906年にかけてピークに達し、7、8千人まで急増していた。その後人数が減ったが、1911年にまだ3、4千人いた。この時期において、中国の国費、私費留学生の数は合計数万人にも達し、中国の留学の歴史においては、空前の盛況となり、一回目の日本留学のピークをなしていた。

この時期、中国人留学生在日本では幅広い分野で専門的な勉強をしていた。特に政治、法律と軍事が最も人気が高く、多くの留学生は愛国活動への参加によって、革命的な道を歩むようになってきた。彼らは日本で、新聞や雑誌を創

刊し、書籍を翻訳・出版し、新しい文化・思想を積極的に宣伝していた。同盟会のメンバー、その革命的宣伝及び武装蜂起の中堅の大部分は、日本で留学していた留学生である。周知の通り同盟会リーダーである黄興、宣伝家の邹容、陳天華、革命烈士の秋瑾、徐錫麟などは皆、初期の留学生である。

第二の時期は1912年—1930年で、日本へ留学する発展期と騒動の頻発の時期である

1911年、武昌蜂起の前後に、数多くの留学生が日本から中国へ戻り、辛亥革命に身を投じた。一時的に、日本にいる中国人留学生の人数は激減した。1913年から1914年にかけて、徐々に回復し、4、5千人まで増え、二回目の留学のピークを迎えた。1930年になっても、日本には中国人留学生がまだ2、3千人いた。この時期の留学生には、国を建設するために日本へ勉強に行く者もいれば、当時の混乱した社会状況に不満を感じ、日本留学を通して国を救う道を探る者もいた。国費留学生もいれば、私費留学生もたくさんいた。この時期においては、中日関係は複雑な局面にあり、騒動が頻発していた。留学生は、政治活動に積極的に参加していた。たとえば1915年、袁世凱が日本の打ち出した『21条』を受け入れ、しかも君主制度を復活させようとする行為に反対運動を起こした。李大釗氏は日本で留学していた留学生を代表して、『警告全国父老書』という文章を起草し、日本から帰国した留学生である蔡鍔氏が護国軍を結集し、武力を通して袁世凱を討伐していた。1915年以降、一部の留学生によって、新文化運動が行われた。有名な雑誌『新青年』の中心的な編集者である陳独秀氏、李大釗氏、魯迅氏などはいずれも日本に留学した経験があり、日本民主主義思想の影響を受けていた。1918年、日本にいる中国人留学生により、『中日共同防衛協定』に反対するデモ行進が行われた。さらに多くの留学生が中国に戻り、帝国主義や北洋軍閥に反対する「五四運動」に加わった。1919年5月4日、一部の帰国した留学生が天安門でのデモ行進とその後の活動に直接参加した。5月7日、日本にいる中国人留学生も大規模なデモ行進を行った。一部の留学生は日本で社会主義やマルクス主義思想の影響を受け、中国へ戻り、中国共産党の創立や初期の活動に加わった。たとえば、陳独秀氏、李大釗氏、

李達氏、李漢俊氏、周仏海氏、周恩来氏、董必武氏、彭湃氏などが挙げられる。この時期、国民党や各地軍閥・官僚によっても大量の留学生が日本に派遣され、主に軍事、政治、法律を勉強していた。国民党や民国政府の要人、軍事将校も日本に留学した経験がある。たとえば蒋介石、汪精衛、胡漢民、戴季陶、閻錫山、何応欽、白崇禧などがそうである。1920、1930年代、留学生による左翼の文化活動も盛んに行われ、郭沫若氏、郁達夫氏、田漢氏などは、文化団体を結成し、刊行物を創刊し、読書活動を主催していた。

第三の時期は1931年－1945年で、中日戦争と日本留学における屈折期である

1931年の“九・一八事変”を皮切りに、日本軍国主義は中国に対して、14年間も続く侵略戦争を起こした。そのため、中日関係が急速に悪化し、両国間に、長期にわたり敵対関係が続いた。当然、このような事態は日本に留学している学生に大きな影響を与えた。“九・一八事変”勃発後、留学生たちは直ちに授業をボイコットした。10月末までの間に、毅然として退学し、帰国した留学生が2000人を超え、その中の多くが抗日救国運動に駆り立てられた。その後の1933年から1934年までの一年間、一部の学生が再び日本へ留学に行って、留学生数は千名あまりに回復した。この時期、進歩的な活動を行った一部の青年知識人は国民政府に迫害されたため、日本へ留学に行く道を選んだ。一方、国民政府も私費留学を奨励し、しかも、当時の日本への留学は費用が安く、手続きも簡単で、パスポートも不要だった。東北を占領した後、日本は満州傀儡政権を成立し、日本にたくさんの留学生を派遣した。こうした中、1935年から1937年までの間、日本での留学生は5、6千名まで増加し、第三次日本留学のピークを迎えた。

1937年7月7日の「芦溝橋事変」後、日本は中国侵略をさらに拡大した。留学生が救国のために、退学して帰国した人が多く、二ヶ月も経たないうちに、帰国者が4000人近くに達した。彼らは救国抗争に奔走し、抗日戦場へ赴いた。中には、淞沪戦役で命を失った69軍軍長呉克仁氏、270旅旅長宮惠民氏のような、正規軍として正面から日本軍と対決し、血を流して戦った人がいた。また、

八路軍・新四軍に入隊して、抗日ゲリラ戦を続けた人もいた。日本軍の「大掃討」に抵抗する戦いで命をささげた八路軍冀魯豫五分区司令官朱程氏がその一人である。1937年から1938年、国民政府は日本留学を経験した人を集め、研修班を開き、抗日のためにたくさんの幹部を養成した。

1938年から1945年まで、中日の国交が断絶され、国民政府が日本への留学生派遣を停止した。この時の留学生は主に偽満州国政府、偽内蒙古自治政府、偽冀東防共自治政府、汪精衛偽政府から派遣された学生であった。その中での少数が、奴隸化教育を受け、日本帝国主義に身を寄せ、或いは各傀儡政権の政界や軍部の役人になった。しかし、多くの留学生は祖国救国の道を選び、愛国抗争に全力を傾注した。

この時期の留学生として、東京大学や東京工業大学に留学し、その後中国共産党の著名外交家になった喬冠華氏、趙安博氏、孫平化氏、また、著名な作家である夏衍氏、田漢氏、林林氏、社宣氏、鐘敬文氏ら諸氏が挙げられる。

第四の時期は1946年－1976年で、日本留学における衰退期である

戦後、中日国交はまだ回復されていなかったため、両国の文化、学術と留学における交流は沈滞状態にあった。1947年、国民党政府は抗日戦争期間中日本にいる留学生に対し、召還と選別・審査の政策を実施した。1952年、日本吉田茂政府と台湾蒋介石政府の間では、『日台条約』が調印された。台湾の学生は続々と日本へ留学に赴いた。中には「国費」生、自費留学生及び日本側の奨学金を取得した学生も含まれていた。統計によると、1950年－1976年の間、日本にいる台湾留学生は約3000人である。また、当時香港、マカオからの留学生もいた。

この時期では、中華人民共和国と日本との国交がまだ回復されておらず、中国大陆からの留学生はほとんどいなかったのである。しかし、いままでの各時期において、日本から帰国した留学生たちは中日友好の第一線で活躍し、中日国交回復と両国関係の正常化に大いに貢献したものである。1963年に成立した中日友好協会を例として挙げると、名誉会長の郭沫若氏、会長の廖承志氏、幹事長の趙安博氏、副幹事長の林林氏、孫平化氏、常務理事の張香山氏、肖向前

氏、理事の田漢氏、夏衍氏は皆、日本留学の経験を持っている。1966年－1976年の十年間にわたる文化大革命の中、数多くの日本留学生は迫害され、不当な扱いを受けた。中日両国有識者の大変な努力によって、1972年ようやく国交回復が実現された。その後、中国政府は少人数でありながらも、日本語習得のため毎年日本へ留学生を派遣するようになった。

第五の時期は1977年から今日までで、日本へ留学する回復期であり、さらに新たな日本留学のピークを迎えた

1977年、文化大革命が終わった後、鄧小平氏は留学生の派遣を提案し、その年、理工、農業を専攻とする学生数人を東京大学へ派遣した。

1978年、中国共産党第十一回三中全会から中国は改革開放の道を歩み始めた。またこの年、『中日平和友好条約』も調印され、中日国交回復は法律の面で確立された。文化、教育の分野における中日友好の発展に伴い、日本への留学生の数は回復されただけでなく、新たなピークも迎えた。1979年、中日両国政府は留学生の派遣問題について合意に達し、留学生を派遣し合うことが正式に決まった。1979年、日本へ行った中国国費留学生は140人で、1982年には、その数はすでに960人に達し、私費留学生もより速いテンポで増えてきた。1981年は121人しかいなかったが、1983年には、もう1098人になり、国費留学生よりも多くなった。特に1987年－1989年の間、新たな留学ブームも出現した。1987年、日本にいる中国人留学生はすでに7000人台に達し、1989年、2万人まで急増した。この新たな留学ブームの原因としては、まず、中国政府による改革開放政策の実施と中日友好関係の発展が挙げられる。中国政府は留学を奨励しているのに対して、数多くの中国青年も目を世界へ向け、視野を広げていた。これと同時に、日本政府は積極的に外国の留学生を受け入れる政策を実施してきた。また、日本への留学が欧米諸国に比べ、道のりが近いし、費用も安いこともその一因である。当然、中には不心得な人もいるので、不法滞在、不法就労などが多少現れてきた。

90年代に入ってから、日本へ留学する形も多元化になり、またさまざまなルートで留学するようになった。中国政府は留学を支援し、帰国を奨励し、留学

生の意思を尊重するという政策を実行してきた。留学生が持続的に学ぶための、できるだけびやかな環境を作った。数多くの留学生は帰国し、就職、起業などによって各分野で活躍しており、中国の発展に大きく貢献しているのである。これも周知のことで、贅言は要しないと思う。

最後に、日本へ留学する中国人留学生の110年にわたる歴史を顧みて、啓発されるところを二点ほど簡単に述べる。

(1) 110年の歴史の中で、留学生は中国の近代歴史を推し進めるのに大いに役に立ったこと

同盟会の創立、辛亥革命、袁世凱に反対する運動、新文化運動、五四運動から、中国共産党の誕生、北伐戦争、抗日戦争、新中国の建設に至り、日本に留学していた留学生たちは大きな役割を果たした。先輩達が持っている愛国革命精神と優良な伝統、及び中国を改革によって振興しようとする決意は後世の人に受け継がれるべきであり、さらに発展させるべきである。今日においても、中国社会主義の近代化を実現させるために、留学生たちは中核となり、必ず重要な役割を果たすことができると思われる。

(2) 留学生は中日友好と両国交流の架け橋及び絆の役割を果たしていること

大勢の中国の若者が海を渡って日本に留学している。彼らは日本各地でさまざまな民間の文化交流を行い、日本国民と友好の絆を固く結んだ。魯迅氏と日本仙台医学専門学校解剖学の教授を務めていた藤野巖九郎氏の間のような先生と学生の友情もその一例である。しかし、日本軍国主義が中国に起こした侵略により、中日関係が悪化し、日本に留学していた留学生に不利な影響を及ぼした。日本へ留学すること自体も戦争及び各政治事件の試練に耐えて、波瀾万丈の道を歩んできた。先輩たちは中日国交回復を実現させ、中日友好交流を盛んにさせるため、数多くの困難な仕事をこなし、大いに貢献してきた。中日友好はたやすく手に入るものではないので、この友好関係を大切にし、文化教育と経済・科学技術など民間の交流を積極的に促進し、中日両国の友好関係を協力し合う善隣関係に向かって推し進めていくべきである。

110 years of Chinese students in Japan: what history can tell us

WANG Xiaoqiu

I believe that the modern history of Chinese students in Japan can be divided into five periods.

The first period is from 1896 to 1911, the first peak of Chinese study in Japan.

At the conclusion of the first Sino-Japanese war of 1894–95, the defeated Chinese were forced to sign the Treaty of Shimonoseki (Maguan Treaty). The Chinese scholar-politician LIANG Qichao (1873–1929) stated that this woke the Chinese up from a dream of four thousand years. The Chinese intelligentsia began to contemplate the reasons for China's defeat and Japan's development. The politician KANG Youwei (1858–1927), deciding to learn from a powerful enemy, studied in Japan and attempted a restoration. Study in Japan became a dream for many young patriotic and ambitious Chinese.

The second period is from 1912 to 1930, a period of development in Chinese study in Japan. After the Wuchang Uprising of 1911, many Chinese students returned from Japan to take part in the Xinhai Revolution, leading to the collapse of the Qing dynasty and the establishment of the Republic of China (ROC). The number of Chinese students in Japan dropped significantly, but from 1913 to 1914 numbers increased steadily, leading to the second peak of Chinese study in Japan.

The third period is from 1931 to 1945, a period of serious setbacks. In the space of ten months from the Mukden Incident of September 18, 1931, more than two thousand students left their Japanese universities and returned to China to join the resistance movement against Japan. In 1933 to 1934, some of these students returned to Japan. At this time, the Nationalist government encouraged private overseas study. Japan was a popular destination, since school fees were comparatively low and passports were not necessary. After the establishment of the Japanese puppet state of Manchukuo, many students

were sent to Japan. In 1935 to 1937, as many as five to six thousand Chinese students studied in Japan, producing the third peak.

The battle of Lugou Bridge (the Marco Polo Bridge Incident) of July 7, 1937, led to a strengthening of the Japanese invasion of China. In less than two months almost four thousand Chinese students are said to have given up their studies and returned to China. In 1937 to 1938, the Chinese Nationalists gathered together people who had studied in Japan, and held courses to train officers for the resistance movement.

From 1938 to 1945, diplomatic relations were severed, and the Nationalist government suspended the dispatch of students abroad. Those Chinese students who did come to Japan were apparently dispatched by Japanese puppet governments, such as Manchukuo, Mongol Border Land, East Hebei Autonomous Council, and WANG Jingwei's Nanjing Nationalist Government.

The fourth period is from 1946 to 1976, a period of stagnation. In 1947 the Kuomintang (KMT) government recalled students who had studied in Japan during the People's War of Resistance Against Japan, screening them and holding hearings. In 1952, the Japanese government under YOSHIDA Shigeru signed the Sino-Japanese Peace Treaty, commonly known as the Treaty of Taipei, with CHIANG Kai-shek's ROC government. Approximately three thousand students from Taiwan studied in Japan between 1950 and 1976. Diplomatic relations with mainland China remained severed, and there were hardly any students from the mainland studying in Japan during these years.

During the ten years of the Great Cultural Revolution of 1966 to 1976, many people who had studied in Japan were persecuted and treated unjustly. It was only in 1972 that diplomatic relations were reestablished.

The fifth period is from 1977 to the present, a period of recovery and a new peak. In 1977, after the Cultural Revolution, DENG Xiaoping proposed dispatching students for foreign study, and students majoring in science, engineering, and agriculture were sent to the University of Tokyo. Political and economic reforms began in 1978 led to the relaxation of control over many

areas of society, and in the same year the Treaty of Peace and Friendship between Japan and the People's Republic of China was concluded, thus opening up the path for Chinese students to study in Japan. The Chinese and Japanese governments reached a formal agreement on the mutual dispatch of students in 1979. In that year, government-sponsored students numbered 149, and this figure climbed to 960 in 1982. The years 1987 to 1989 saw an especially strong peak. More than seven thousand Chinese students were in Japan in 1987, but in 1989 this figure climbed to twenty thousand.

This survey of 110 years of Chinese study in Japan reveals two main points. First, students who came to Japan to study during these years have played an important role in China's modern history. Second, these students act as important go-betweens in building the friendly relationship between China and Japan, and contribute significantly to interchange in a broad range of fields.